神奈川県ビリヤード協会　-理事会　議事録-

2025.12.17 12:00～　14:10 Zoom 会議

参加者：安藤・田口・荻原・板橋・黒岩・石井・杉万

議論内容：

1．　**大会業務フローの訂正**
2．　**理事会の検討課題**
3．　**今年の反省会**
4．　**新村岡市民センターへのビリヤード台の寄贈について**
5．　**２０２６年度のスケジュール**

議題１：大会業務フローの訂正

Ⅰ．大会中止時の連絡フローについて

・大会業務フロー　No.17「中止の関係者連絡」について、これまで記載のなかった協力者への連絡を追記したいと考えている。現状では、事務局長がメールまたは LINE で一斉通知する運用を想定している（石井）。

・No.16 に中止判断の流れ
「事務局長 → 大会責任者 → 理事長 → 事務局長」
が定められているのであれば、決定後は速やかに関係者へ通達すべき。
協力者への連絡も重要だが、運営者に情報が行かないケースが出ないよう、通知の徹底が必要だと思う（黒岩）。

・中止の判断が決まった時点で、運営者・協力者・参加者へ同時に情報が届く形にしないと、現場に混乱が出たり、関係者の不信感につながる可能性がある（黒岩）。

・今後は連絡の遅延や漏れが起きないよう、中止決定後の連絡については、事務局が一元的に管理・伝達する形で運営していきたい（石井）。

［結論］

・大会中止が決定した場合は、事務局長が運営者・協力者・参加者へ速やかに一斉通知を行う。
・通知遅延や連絡漏れを防ぐため、中止後の情報伝達は事務局が一元管理する。

議題２：理事会の検討課題

１．弔事対応の判断基準・裁量について

・弔事対応について、毎回理事会決裁にすると対応が遅れるため、一定の裁量を持って現場対応できる仕組みを作った方がよいと思う。例えば、上限金額を決めておけば、「出す／出さない」の判断を迅速にできるのではないか（板橋）。

・決裁権を「いくらまで」と明確にしておき、場合によっては事後報告になるケースがあってもよいと思う。例えば、理事長と他理事２名が賛成した場合は、理事会決定と同等とみなすやり方も考えられる（板橋）。

・一方で、規定を細かく書きすぎると、本来それほど関係が深くないケースでも「規定があるから出さなければならない」という状況になってしまう懸念がある。協会として関係性が深い場合は対応すべきだが、その判断余地は残しておいた方がよいと思う（板橋）。
・まずは上限金額を決めることが先決だと理解している。
・過去の対応を振り返ると、弔事対応の上限は 10,000 円として運用してきた（石井）。
・会計面から見ても、これまでの実績としては 10,000 円を上限として扱ってきた認識で問題ない（田口）。
・では、上限を 10,000 円とした上で、具体的な金額（5,000 円、3,000 円など）は理事長が提案し、事務局と会計が同意すれば対応できる形がよいと思う。協会に協力している店舗や、これまでの人間関係も考慮しながら、金額はフレキシブルに判断できる方が現実的だと思う（板橋）。

［結論］
・弔事対応の上限金額は 10,000 円とする。
・具体的な金額は、理事長が提案し、事務局および会計が同意すれば実施可能とする。
・迅速な対応を優先し、事後報告となるケースも認める。

２．来場者を加盟店舗につなげる導線づくり
・レクリエーション大会に来場した方が、大会当日だけで終わらず、実際に加盟店舗へ足を運んでもらえるような来店導線を作る必要があると考えている（石井）。
・案としては、KBA 公式 LINE を窓口にして、質問対応や導線案内、還元手続きをまとめる方法や、協会から参加者へ直接還元するキャッシュバック方式などを検討している。来年の大会で運用するのであれば、今から調べながら形にしていく必要がある（石井）。
・公式 LINE は、顧客を段階別に分けて管理できる仕組みがある。レクリエーション大会専用で作るのは少しもったいなく、県知事杯や KBA 杯など、協会全体の告知に使いながら新規・ビギナー・既存層と分けて運用する方が現実的だと思う（杉万）。
・ただし、無料で使える範囲は限られており、フォロワー数や配信回数が増えると月額で 8,000 円～10,000 円程度の費用がかかる。無料でできるのはあくまで「お試し」だと考えた方がよい（杉万）。
・レクリエーション大会の来場者は、親子連れが多い印象があるが、実際の年齢層はどうか（板橋）。
・親子での来場が多く、父親が 30～40 代、子どもは小学生から中学生が中心だと思う（安藤）。
・その年齢層であれば、ネットや LINE を使った導線もあり得るが、大会当日に使える金券やチケットのようなものを配った方が手軽ではないかと思う。例えば、最初の 1 時間のうち 500 円分を協会が負担する、といった形も考えられる（板橋）。
・実物のチケットであれば、何枚配って、何枚回収されたかで利用率も把握できる。仮に 500 円×100 枚配っても、利用率が 3 割なら実際の負担は 30,000 円程度で、費用対効果としては悪くないのではないか（板橋）。
・ただし、加盟店舗に事前に「使えますか」と確認を取ると、返答が返ってこない店舗が多くなる懸念がある（石井）。
・そこで、加盟店舗で通常通りプレーしてもらい、領収書を KBA 公式 LINE に送ってもらって、協会からキャッシュバックする方式であれば、店舗側は特別な対応をしなくて済むと考えた（石井）。
・その方式であれば、加盟店舗側が事前に把握していなくても成立する点は大きい。ただし、「使えると思って来店したら使えなかった」というトラブルは避ける必要がある（板橋）。
・藤沢総合高校での授業支援のように、お試し的なチケットを置いていく形も考えられる。例えば、1 時間分を協会と店舗で折半するなど、将来的な来店につなげる方法もあり得ると思う（板橋）。
・いずれの方法も一長一短があり、現時点でどれか一つに決めるのは難しい。ここで無理に結論を出すより、一度整理してから再度検討した方がよいのではないか（板橋）。

［結論］
・レクリエーション大会来場者の店舗誘導については、現時点では結論を出さず、継続検討とする。

・今後、再度理事会で協議する。

［タスク］
・公式 LINE の費用・仕様については、杉万が調査し、事務局へ報告する。

3. 県知事杯フォーマットについて（参加人数・セット数・開催形態）
参加人数拡大と大会構成について
・今年のエントリー状況について、定員 96 名は想定よりも速く埋まり、キャンセル待ちや最初からエントリーできないと諦めていた人もいたと聞いている。来年は 128 名編成でも組めるのではないかと考えている（石井）。
・128 名に増やすのであれば、1 日開催のまま行う場合、1 回転増に合わせてセット数を下げる設計が必要だと思う（荻原）。
・ベスト 16 までは、1 試合あたり「1 時間半見積り」で大きな問題はなかったが、ベスト 16 以降は体力や集中力の低下、ラック立ちの停滞などもあり、どうしても進行が遅くなる印象がある。後半はセットダウンで対応する方が現実的だと思う（荻原）。
・その方向性で概ねよいと思う。定員は増やしたい一方で、神奈川の県知事杯として「9 先」の伝統はできるだけ残したいという思いもある。後半が遅くなるのは見えているので、予選終了後の進行調整をどう上手くやるかが鍵だと思う（安藤）。
・ベスト 16 までは実力差がある分だけ終局が早いが、それ以降は拮抗してフルセットになりやすい。主催者が決めている方式の「9 先」は、これまでずっと続けてきたものなのか、その経緯も確認したい（黒岩）。
・以前は 9 先で実施していたが、当時は今ほど参加人数が多くなかった。その規模であれば、当時の運営体制でも問題なく成立していた（田口）。
・128 名を超える規模になれば、2 日開催も検討対象になるが、会場費の問題があり、できれば 1 日で終える設計にしたい。受付時間を 30 分繰り上げるなど、終盤に余裕を持たせる案も含め、KPBA 側で案をまとめ、KBA とすり合わせていきたい（荻原）。
・時短の方法としては、「セットダウン」と「セットアップ」の 2 つがあるが、今回はなぜセットダウンを選ぶのか、その根拠を整理しておきたい（石井）。
・現在は事前エントリー制で振込も完了しているため、128 名フルエントリーを前提にすると、セットアップ方式は予選のセット数を下げることで参加者の読みがブレる可能性がある。一方で、セットダウン方式であれば、集客面や実力差の明確化という点で納得感が生まれやすいと思う（荻原）。
・まずはセットダウン方式で臨み、フルエントリーが安定してきた段階で、将来的にセットアップ方式を検討する、という段階的な考え方がよいと思う（荻原）。

［結論］
・来年度の県知事杯は、参加人数 128 名を想定して検討を進める。
・1 日開催を前提とし、後半はセットダウン方式を軸に大会構成を検討する。
・具体的な方式案は、KPBA から KBA へ提示し、今後詰めていく。

［タスク］
・来年度の大会方式案について、KPBA で整理した案を KBA へ提示する（荻原）。

4. ドレスコードについて
Ⅰ. 現行要項の課題認識
・今年の大会運営を通じて、女子のドレスコードが分かりにくい、要項全体が煩雑で読みづらい、という声があった（石井）。
・特に、スカートは可なのか、キュロットはどうか、靴はサンダル不可とあるが、どこまでが許容範囲なのか、迷いやすいという意見が多かった（杉万）。

・黒系の革靴についても、ローファーやパンプスは認められるのかなど、問い合わせが多かった印象がある（石井）。

Ⅱ．JAPA 規定との比較と問題点
・JAPAのドレスコードを確認すると、Bコードではチノパン・スニーカー可、Aコードではベスト・ネクタイ必須など、段階的な規定になっている（荻原）。
・しかし、そのいずれも県知事杯の実態とは合っていない。B コードでは緩すぎ、A コードでは厳しすぎると感じる（荻原）。
・JAPA 規定をそのまま流用するのは難しく、KBA 独自の基準を作る必要があると思う（石井）。

Ⅲ．規定の書き方について
・細かく規定を書けば書くほど、抜け道が生まれたり、想定外の問い合わせが増える可能性がある（板橋）。
・写真付きで具体例を示す方法もあるが、作成や更新の手間が大きく、かえってトラブルの元になるのではないか（杉万）。
・ある程度は常識的な服装であるかどうかを基準にし、迷った場合は、大会当日の判断に委ねる余地を残した方が現実的だと思う（板橋）。

Ⅳ．要項への記載方法
・ドレスコードの詳細を大会要項にすべて書き込むと、要項がさらに長くなってしまう。要項には概要のみ記載し、詳細は別途 HP に掲載する形がよいのではないか（石井）。
・要項には、「規定を満たさない場合、出場できない可能性がある」という点を明記しておけば、事前の注意喚起としては十分だと思う（黒岩）。

［結論］
・ドレスコードは、KBA 独自の基準を文章で定義し、HP に掲載する。
・大会要項には概要のみを記載し、詳細は HP への参照リンクとする。
・要項には、「規定を満たさない場合、出場できない可能性がある」旨を明記する。

［タスク］
・ドレスコード文案は、石井が作成する。

5．県知事杯および KBA 杯　エントリーフォームのショッピングカート化
エントリー方式・定員管理について
・現在は、メールによる事前エントリーと振込を前提に受付を行っているが、定員到達時の管理やキャンセル待ち対応について、事務局側の負担が大きくなっていると杉万から指摘がありエントリーフォームのショッピングカート化の案がでていた。（石井）
・自動返信メールが届かないケースがあり、申し込み数と実数にズレが出ることが毎年数件発生している。最終的には目視での確認が必要になっている（石井）。
・定員に達した時点で、自動的に受付を締め切る方式を検討したいが、無料で実現できる方法があるかどうかは課題だと思う（荻原）。
・一般的に、ショッピングカート方式で「在庫＝定員」として管理する方法もあるが、手数料が発生するケースが多く、費用面の問題がある（杉万）。
・また、カート方式を採用した場合でも、一時的に複数枠を押さえる、いわゆる「買い占め」のような状況を完全に防ぐことは難しいのではないか、という指摘があった（石井）。
・送信ボタンの押下回数で定員カウントを行うこと自体は可能だが、自動応答メールが不達だった場合、参加者側は「申し込めていない」と判断し、重複申込につながることがある。そのため、完全な自動化は難しいと感じている（石井）。

・来年は、加盟店優先枠と一般枠を分けて受付を行う予定であり、締切、仮受付、キャンセル待ちなど、通知の種類が増えることで、人的オペレーションの負荷はさらに上がると想定している（石井）（板橋）。
・これらを踏まえ、システム化によって逆にトラブルが増える可能性もあるため、拙速に導入するのではなく、慎重に検討した方がよいのではないか、という意見があった（荻原）。
・システム面については、現行方式を踏まえつつ、引き続き改善案を検討していく必要があると思う（石井）。

［結論］
・エントリー方式については、現行方式を基本としつつ、システム改善の検討を継続する。
・定員管理の完全自動化については、費用面・運用面を含めて慎重に検討する。

6. 県知事杯および KBA 杯　チェスクロック追加確保の検討
・今年の大会では、KBA が保有しているチェスクロックの台数が不足し、KPBA からチェスクロックを借りて対応した（荻原）。
・ただし、KPBA のチェスクロックは表示方法やリセット操作が KBA 所有のものと異なり、セットできる人が限られてしまった。片側が時間切れになった場合に操作できず、試合が中断する場面もあった（荻原）。
・大会当日のスムーズな進行を考えると、仕様が統一されたチェスクロックを KBA で一定数確保しておく必要があると思う（荻原）。
・運営側の負担やトラブル防止の観点からも、同一機種で揃える方が望ましいと感じる（石井）。

［結論］
・大会運営の円滑化のため、KBA としてチェスクロックの追加確保をする。

7. 女子級代表選考について
Ⅰ. 現行制度への問題意識
・現行制度では、KBA 杯（B 級代表選抜）や県知事杯（A 級代表選抜）で女子選手が優勝した場合でも、全国大会では女子級にしか出場できない仕組みになっている。優勝したクラスで全国に出られないのはおかしいと感じている（黒岩）。
・本来であれば、A 級で優勝したのであれば A 級、B 級で優勝したのであれば B 級として全国大会に出場できる方が自然ではないかと思う（黒岩）。

Ⅱ. 制度上の制約について
・現行の代表区分や出場資格については、NBA の全国規定に基づいて決められており、KBA 単独で変更できるものではないという説明があった（石井）。
・この制度自体を変えるとなると、NBA 総会での決議が必要になるため、支部レベルで簡単に見直せる話ではないという認識である（石井）。
・これに対して板橋から、今回の話は「規定がある・ない」という単純な問題ではなく、NBA の組織の成り立ちや、上位団体の考え方が影響しているのではないかという指摘があった。
・具体的には、JOC ではオリンピック競技が男女別で実施されており、その考え方を前提として、NBA でも男女別に大会や代表区分を設けているという背景がある、という説明があった（板橋）。
・そのため、現場では「なぜ女子は別なのか」「なぜ同じ扱いにならないのか」といった声が出やすいが、NBA としても簡単に変えられない前提条件があるという話だった（板橋）。
・制度に制約があること自体は理解できるが、そのことが十分に説明されていないため、誤解や不満につながっている可能性がある。どこまでが全国規定で、どこからが支部の裁量なのかを整理して伝える必要があるという意見があった（板橋）。

［結論］
・すぐに制度を変えることは難しい前提に立った上で、KBA としては、運用の工夫や説明の仕方で対応できる部分を考えていく必要がある、という整理になった。

Ⅲ．代替案・運用案について
・女子級の選考会を、他の代表選考とは別枠で実施する方法も考えられる。日程を分ける、あるいは先行開催するなど、柔軟な運用ができないか検討したい（黒岩）（板橋）（荻原）。
・外国籍選手については、「大会出場は可、代表特典はなし」という整理で運用している。女子についても、同様に「大会出場は可、代表枠（特典）は付与しない」と整理すれば、出場機会自体は担保できるのではないか（杉万）。
・代表枠と大会出場の考え方を切り分けて整理することで、制度の中でできる対応が見えてくると思う（杉万）。

［結論］
・KBA 主催大会への女子選手の出場自体は認める。
・ただし、全国大会への代表枠（特典）は付与しない。
・女子級については、別途選考会を実施する。
・女子級選考会は、年間ポスターに掲載し、周知を行う。
・具体的な運用については、KPBA 内で意見を取りまとめたうえで進める。

［タスク］
・女子級選考会の日程は荻原が１２／２６（日）までに KBA に提出する。

８．わかばカップ／新企画について
Ⅰ．わかばカップの現状認識
・加盟店アンケートを見ると、わかばカップに対する評価は店舗ごとに差があり、歓迎されている一方で、負担感を感じている店舗も少なくないと感じている（安藤）。
・参加人数が想定より集まらず、赤字イベントになっている現状も踏まえると、年 4 回実施している今の形は、一度見直した方がよいのではないかと思う（安藤）。

Ⅱ．企画趣旨と課題の整理
・わかばカップの本来の目的は、「C 級・初心者のモチベーション形成」だと思っている。大会形式にこだわらず、もっと柔軟に設計してもよいのではないか（杉万）。
・一方で、勝敗に寄りすぎると、初心者が楽しめない形になってしまう。楽しめる要素を重視した設計に寄せる必要があると思う（石井）。
・協会主催で行うのであれば、講師配置やサポート体制など、「協会ならでは」の価値をもう少し前面に出してもよいのではないか（石井）。

Ⅲ．新企画の方向性について（企画概要の説明）
・わかばカップの趣旨自体は否定していないが、今の形式では参加のハードルが高く、結果的に人が集まりにくくなっていると感じている。（安藤）
・特に、C 級や初心者が「一人で大会に申し込む」ことに心理的な不安を感じているケースが多い。その点が、参加者が伸びない一因になっていると思う。（安藤）
・そのため、勝敗を競う正式な大会形式にこだわるのではなく、最初から交流型・練習型に寄せたイベントの方が、初心者には参加しやすいのではないかと考えている。（安藤）
・具体的には、ペア戦やチーム戦のように、一人で参加しなくて済む形式を想定している。店舗単位や知り合い同士で参加できる形であれば、心理的なハードルはかなり下がるのではないか。（安藤）

・また、公式戦として位置づけると、要項や運営がどうしても重くなり、結果的に事務局や店舗の負担が大きくなる。最初は非公式イベントとして実施し、様子を見ながら形を整えていく方が現実的だと思う。（安藤）
・回数についても、年に何度も行うのではなく、まずは試行的に 1 回実施し、反応を見てから次を考えたいという考えでいる。（安藤）

Ⅳ．今後の進め方（体制）について
・今回の議論を通じて、企画や要項の作成を事務局任せにすると、事務局の負担が大きくなりすぎる。（杉万）。
・企画段階から、誰が中心となって考え、どこまでを事務局が担うのかを整理しないと、結果的に事務局が「全部やる」形になってしまうと思う（板橋）。
・今後の新企画については、企画を提案する側が、ある程度形（企画案・要項案）まで作った上で理事会に出す流れにした方がよいのではないか（板橋）。
・わかばカップに代わる新企画については、安藤が正会員と相談しながら、企画内容や要項案を検討し作成していく形で進めたい（安藤）。

［結論］
・わかばカップについては、次年度は頻度・内容を柔軟に見直す。
・初心者が参加しやすい交流型・非公式イベントを中心に新企画を検討する。
・新企画の検討にあたっては、企画・要項の作成を事務局任せにしない。

［タスク］
・具体的な企画概要・要項案は、安藤が正会員と相談しながら作成する。

9．2026 年度の県知事杯の日程調整について
Ⅰ．開催候補日の確認
・来年度の県知事杯の日程について、現時点で以下の候補日を想定している（石井）。
- 第 1 候補：10 月 18 日（日）　- 第 2 候補：10 月 4 日（日）
・会場確保や他大会との兼ね合いもあるため、KPBA 側の意向や調整状況を確認したい（石井）。
Ⅱ．KPBA 側の調整状況について
・KPBA 側としては、第 1 候補の 10 月 18 日（日）を第一優先で考えている（荻原）。
・10 月 4 日（日）については、他行事との重なりや準備期間の都合もあり、可能であれば避けたいという認識でいる（荻原）。
・現時点では、10 月 18 日（日）で進められるよう、KPBA 内で調整を進めている状況である（荻原）。

［結論］
・県知事杯の日程については、第 1 候補の 10 月 18 日（日）を軸に調整を進める。

［タスク］
・県知事杯の日程は荻原が１２／２６（日）までに KBA に提出する。

議題 3：今年の反省会
・昨年に実施した KBA を評価するアンケートについて、今年も実施するか（石井）。
・正会員や加盟店舗を対象に実施しているアンケートについて、なかなか回答が集まらない状況が続いている（石井）。

・これに対して、回答数が少ないという課題はあるものの、それでも正会員や加盟店舗に対して意見を聞く機会としてアンケートは続けた方がよいのではないか、という意見があった（板橋）。
・あわせて、アンケートの回答が少ない背景として、加盟店舗との日頃のコミュニケーションが十分に取れていないのではないか、という指摘があった。（板橋）
・加盟店舗に対して、協会の考えや取り組みがどこまで伝わっているのか、また、店舗側の声をどこまで拾えているのかについて、一度整理した方がよいのではないか、という話があった（板橋）。

［結論］
・アンケートは今年も実施する。
・アンケートそのものだけでなく、加盟店舗との情報共有や関わり方についても、今後の課題として認識しておく必要がある、という整理になった。

［タスク］
・昨年のアンケートをベースに事務局がアンケート項目を作成し、理事会で共有した上で正会員および加盟店舗へ展開する。

Ⅰ．大会全体を通しての振り返り
・今年度は、県知事杯、KBA 杯、わかばカップなど、複数の大会やイベントを実施してきたが、全体として事務局の負担が大きくなっていると感じている（石井）。
・特に、大会要項の作成、参加者対応、当日の運営調整などが事務局に集中しやすい構造になっていたと思う（板橋）（杉万）。
・大会自体は大きなトラブルなく実施できているが、その分、「何とか回している」状態が続いているのが実情（石井）。

Ⅱ．県知事杯・KBA 杯の運営について
・県知事杯については、参加人数が増え、大会としての注目度も高まっていると感じている。一方で、運営規模が大きくなったことで、準備や調整にかかる負担も増えている（安藤）。
・KBA 杯についても、大会としては定着してきているが、要項作成やエントリー対応など、細かい部分での調整が毎回必要になっている（石井）。
・大会運営そのものは、理事や関係者の協力で成り立っているが、役割分担が曖昧なまま進んでいる部分もあると思う（板橋）。

Ⅲ．わかばカップを含む普及イベントの反省
・わかばカップについては、企画の趣旨自体は良かったと思うが、実施回数や形式が現状に合っていなかった可能性がある（安藤）。
・わかばカップについて、準備や調整にそれなりの手間がかかっている一方で、参加者数が思ったほど伸びていない状況が続いており、事務局側の負担に対して、結果が見えにくくなっているのは正直なところ（杉万）。
・特に、要項作成や事前準備、当日の運営対応などは毎回発生しており、その労力に見合った形になっているのか、一度立ち止まって考える必要があるのではないか、という問題提起があった（杉万）。
・普及イベントについては、「やるか／やらないか」だけでなく、どういう規模・体制でやるのかを事前に整理する必要がある（板橋）。

Ⅳ．企画・要項作成と事務局負担について
・今年を振り返ると、企画段階から要項作成、最終的な調整まで、事務局が担う範囲が広くなりすぎていたと思う（石井）。

・今後も同じ進め方を続けると、事務局の負担が増え続け、継続的な運営が難しくなるのではないか（杉万）。
・大会やイベントについては、企画を提案する側が、企画概要や要項案をある程度まとめた上で理事会に諮る形にした方がよいと思う（板橋）。
・事務局は、全体調整や最終確認を担う立場とし、最初からすべてを抱え込む形にはしない方がよい（板橋）。

［結論］
・今年度の運営を通じて、事務局負担が大きくなっている点が共通の反省事項として共有された。
・今後は、企画・要項作成を事務局任せにせず、企画提案者が中心となって進める。
・事務局は、全体調整・最終確認に注力する体制を目指す。

議題４：新村岡市民センターへのビリヤード台の寄贈について

Ⅰ．提案の背景と趣旨

・JR 東海道線に建設中の村岡新駅（仮称）は、藤沢駅と大船駅の間に位置し、2032 年頃の開業を目指しています。数年後に新しい駅が開業予定であり、その駅の近くに位置する新村岡市民センターは、今後利用者が増える可能性が高いと考えている（石井）。
・そのような場所にビリヤード台を設置できれば、多くの人が自然にビリヤードに触れる機会が生まれ、普及活動につながるのではないかという発想から、今回、理事会の議案として提案した（石井）。
・現時点で、市民センター側から正式な相談や要望があったわけではなく、まずは協会としてこの構想をどう考えるか、センター長に話をしに行くかどうかを含めて意見交換したいという趣旨である（石井）。

Ⅱ．設置した場合の効果と懸念点

・新しい駅ができることで、市民センターの利用者層が広がる可能性があり、普及拠点としては良い立地だと思う（安藤）。
・これに対して、ビリヤード台を設置するとなると、運搬や設置、備品などを含めて、費用が発生する話になるのではないか、という指摘があった（黒岩）。
・費用の話をする前に、そもそも市民センター側にビリヤード台を置きたいというニーズがあるのかどうかを確認する必要があるのではないか（板橋）。
・また、設置した場合の管理や、破損時の対応などについても、協会がどこまで関与するのかを事前に整理しておかないと、後々負担になる可能性がある、という話があった（板橋）。
・まずは、「置けるかどうか」「どういう使い方を想定しているか」をセンター側に確認した上で、具体的な話を進める必要があると思う（板橋）。

Ⅲ．理事会としての進め方

・いきなり寄贈や設置を決めるのではなく、構想段階として理事会で共有したうえで、センター長に話を聞きに行くかどうかを判断する、という位置づけでよいのではないか、という整理があった。
・話をしに行く場合でも、協会として「どこまで対応できるのか」「何ができないのか」をあらかじめ整理したうえで臨む必要がある（板橋）。

［結論］
・新村岡市民センターへのビリヤード台設置については、数年後の新駅開業を見据えた普及構想として共有された。
・今後の具体的な対応については、理事会での合意形成を踏まえて判断する。

［タスク］
・現時点では寄贈を決定せず、石井がセンター長に話をしに行き、まずはニーズがあるか確認する。

議題 5：2026 年度のスケジュール

Ⅰ．年間スケジュール作成の考え方

・2026 年度のスケジュールについては、例年どおり大会を並べるのではなく、今年の反省を踏まえて整理していく必要があると考えている（石井）。

Ⅱ．主要大会の日程配置について

・県知事杯、KBA 杯などの主要大会については、これまでの実績を踏まえつつ、他団体大会や公式戦と重ならないよう配慮する必要がある（荻原）。
・特に県知事杯は、規模も大きく、準備期間も必要なため、できるだけ早い段階で日程を固めたい（荻原）。
・KBA 杯についても、開催時期が後ろ倒しになると、年末進行や会場確保に影響が出るため、全体スケジュールの中で位置づけを整理したい（安藤）。

Ⅲ．普及イベント・新企画との関係

・2026 年度については、わかばカップの見直しや、新しい普及イベントの検討が予定されているため、大会スケジュールと重ならない配置が重要になる（石井）。
・普及イベントを増やしすぎると、結果的に運営・調整を行う人が足りなくなる可能性がある。回数や時期は慎重に決めた方がよい（板橋）。
・まずは、主要大会を優先して配置し、その後に可能な範囲で普及イベントを検討する流れが現実的だと思う（杉万）。

Ⅳ．スケジュール確定までの進め方

・現時点では、2026 年度の詳細日程をこの場ですべて確定させるのは難しい（石井）。
・まずは、年間の大枠（主要大会・想定時期）を整理した案を事務局が作成し、理事会で共有するのがよいと思う（石井）。

［結論］

・2026 年度のスケジュールについては、今年度の反省を踏まえ、事業数・時期を整理する。
・まずは、主要大会を優先した年間スケジュール案を作成する。

［タスク］

・スケジュール案は、事務局がたたき台を作成し、理事会で協議する。

以上